

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 竹口 美久	留学機関名 チュラーロンコーン大学
留学先国名 タイ	留学期間 西暦 2011 年 9 月 ~ 2013 年 8 月
研究テーマ タイ都市部における外国人労働者－教育をめぐる排除と包摂	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p><b>【研究の背景】</b></p> <p>タイでは、1990年代に近隣諸国（特にカンボジア・ラオス・ミャンマー（CLM 諸国））からの移動労働者が急増した。政府は、1992年から不法就労者登録制度の整備に着手し、労働許可証の交付によって国内での就労を認める手続きを定めてきた。現在タイ国内で就労している外国人労働者の地位は、①合法労働者（外国人登録済みで就労許可を有する）、②「半合法」労働者（外国人登録済み）、③不法労働者（いずれもない）、の3つに分類される。</p> <p>労働者がタイ社会に滞留し、<u>第二世代が生活するようになりつつある現代のタイにおいて外国人労働者問題を考える際、管理制度や窮状といった現状把握に増して重要なのは、近い将来への展望、すなわち第二世代の境遇であろう。</u>従来、タイでは外国人労働者が子供を帯同することが認められており、国内での出産も黙認されていた。従って、政府は外国人労働者の子供の存在を認め、教育の機会を提供する制度を構築してきた。ところが、2010年2月から実施予定だった新制度（諸事情により実施は先送りされた）では、外国人労働者がタイ国内で出産することを認めていない。彼らは家族を帯同することも許されない。つまり、<u>外国人労働者の子供は制度上タイ国内に存在しないこととなり、政府が対応を放棄する可能性が懸念される。</u></p>	
<p><b>【研究の目的と意義】</b></p> <p>本研究の目的は、<u>タイ都市部の外国人労働者をめぐる排除や包摂の実情を、子供の教育を例として実証的に解明することであり、更にはメコン川流域地域における人の移動の分析を通して、地域統合の将来を展望することである。</u>外国人労働者とホスト社会の関係を解明するに当たり、フィールド調査によるミクロなデータ収集とその分析に加え、学術論文や公文書、法律、新聞記事の読解を通して、マクロな鳥瞰図を絶えず意識する。これによって、<u>先行研究では不足しがちだった広い視点・長い時間軸での分析が可能となる。</u></p> <p>多くの先行研究には、①調査対象が国境地域／ミャンマー人に偏っている、②ホスト社会への視点が欠落している、③時間軸が短い、等の問題点がある。本研究は、<u>労働者が多く、ホスト社会との濃密な関係が不可欠となる都市部を調査対象とし、外国人とタイ人の双方を射程に収める新しい試みとなる。</u>又、今後一層深刻化するであろう<u>第二世代の排除・包摂のあり方を解明しようとする研究はこれまでにないという点でも、学術的意義は大きい。</u>更に、ミクロな分析から導かれる本研究の成果は、メコン川流域地域、ASEAN、東アジアといった地域統合の可能性に、効果的且つ持続的な政策策定・運用の在り方を示すことで、実務の領域にも貢献するものである。</p>	

# 成果報告書

記入日 2013年 4月 19日

氏名 竹口 美久	留学先国名 タイ	所属機関 チュラロンコーン大学政治学部
研究テーマ： タイ都市部における外国人労働者－教育をめぐる排除と包摂		
留学期間： 2011年 9月 ～ 2013年 3月		
<p>タイ都市部の非熟練外国人労働者（カンボジア・ラオス・ミャンマー出身者）をめぐる排除や包摂の実情を、子どもの教育を例として実証的に解明することを目的とした調査・研究のため、外国人労働者が多く、ホスト社会との接触を避けられない大都市であるバンコク都市圏での調査を実施しました。外国人労働者たちが置かれている状況はもちろん、彼らに対する、いわゆるタイ知識人の見識及び一般タイ人の感じ方を考察するため、文献収集、特に現地語新聞や大学での意見交換を重視しました。</p> <p>【留学について】</p> <p>2011年9月より、チュラロンコーン大学政治学部にも所属し、初めの4ヶ月間はタイ語を徹底して学ぶことに決め、語学の授業を受けました。その間に、大学間協定がない為に学生として登録することが難しいという事実が判明し、チュラロンコーン大学での身分が客員研究員に変更されました。上記会計報告に関連することですが、当初予定していた入学金や授業料の納入が不要となりました。実際の大学生活では、博士課程の院生と同様に扱って頂き、1年間で4つの授業を受講しました。政治学部の講義（3つ）に加え、移民研究センターが提供している講義（1つ）を受講したことで、人間関係が大きく広がったのを感じると同時に、タイ語講義の受講と発表をやり遂げたこと、現地語新聞や公文書の読み込みを通して、私自身のタイ語能力がアカデミックレベルにブラッシュアップされたと自信ができました。</p> <p>また、チュラロンコーン大学はタイの学術研究ネットワークの中心に位置する大学であり、国際的なワークショップが頻繁に開かれていました。これらのワークショップや研究会に参加することで、自身の研究関心を深め・発展させるだけでなく、現在タイの学会・研究者の間でどんなことがトピックになっているのか学ぶことができました。</p> <p>調査対象である非熟練外国人労働者に関する文献の収集に関して、移民研究センターの先生方の中には政府の諮問委員会のメンバーもおり、公文書へのアクセスについての他、データの読み方や聞き取り調査に関して、多くの示唆を得ました。様々な大学・研究所の先生・研究員・院生とは、研究者として外国人労働者政策にどのような姿勢でかかわっているのか／かかわるべきなか、研究がどのような社会的意義をもつのか、について意見交換を行い、類似の研究関心を持つ人々とのネットワーク構築が進みました。また、ワークショップ等を通じて知り合った政府機関の職員や学校の先生、NGO職員たちには、フィールド調査に直結する助言を貰っただけでなく、直接彼らのフィールドで私を受け入れて貰うこともありました。</p>		

## 【調査研究について】

フィールド調査に関しては、公立学校及び園周辺コミュニティを中心に、学校・タイ人保護者・外国人保護者・子どもたち、と大きく4つにグループ分けをして聞き取りを計画しましたが、調整が難航し、思うように調査ができませんでした。困難は大きく3つですが、先ず1つ目に、研究テーマに伴う困難として、非熟練外国人労働者の半数以上が不法入国や不法滞在であり、私が彼らに聞きたいと考えていることも非常にセンシティブな内容であるために、聞き取りを行う前の信頼関係を築くために時間をかけました。2つ目は、繁文縟礼な行政組織の性格で、「いかに美しい書類をつくるか」に多大な神経と時間を費やしました。最後に、特に学校での聞き取りでは、「外国人」「博士課程の学生」「チュラロンコーン大学の研究員」という肩書きにより敬遠されることが多々あり、調査に結び付けられませんでした。

これらの困難の共通する原因として、都市をフィールドに選んだことが少なからず考えられます。国境地域では、外国人の人口がタイ人の人口を上回ることも珍しくなく、地縁も強いため、比較的聞き取りが容易でした。何度かタイーミャンマー国境やタイーカンボジア国境に足を運びましたが、非常にオープンな雰囲気生活している外国人労働者たち、地元のタイ人たちに話を聞くことができました。公立学校における外国人児童の受け入れも、バンコクとは桁違いに多く、入学に必要な書類や手続きが簡略化されているケースが散見されました。また、国境付近には外国人支援NGOが多く展開しており、彼らの非正規教育施設であるラーニングセンターを含めると、半数近くの子どもが教育機会を得ていることが明らかになりました。それに比べて、都市部の学校では全生徒に占める外国人児童の割合が極めて低く留まっています。

2013年2月に労働省外国人労働者管理局が発表したデータによると、タイ国内の外国人労働者（のうち合法労働者は約110万人、38万人超が合法化手続きの途中にあります。バンコクの外国人労働者登録数は全国トップで約13万人、バンコク首都圏全域では35万人以上が確認できます。これに加えて、可視化しない不法労働者が存在します。不法労働者は一般に合法労働者の2~3倍存在すると言われており、これに従えば、バンコク首都圏には100万人を超える外国人労働者が居ると考えられます。彼らが帯同した子どもたちのうち、公教育にアクセスできるのは全体の1%に満たない僅かな子だけです。教育省が「全ての子どもに教育を」という方針を打ち出しているにも係わらず、公立小学校の校長がこれを知らない、または知っていても受け入れに係るコスト高を理由に受け入れを拒否するケースが多く、一方で、外国人父兄サイドから積極的に働きかける事例も殆どみられませんでした。1つの要因として、NGOや外国人集住地域の緩やかな共同体をまとめるリーダーの存在があります。教育を軽視しているわけではなく、また従来指摘されてきたように学齢期の子どもを故郷の祖父母に預けることもなく、子どもたちをバンコクで育て、タイ語教育を—それがフォーマルかインフォーマルかに係わらず—与えようとする父兄が増えていると考えられます。

これから、フィールド調査で集めたデータを改めて整理し、タイでは読みきれなかった文献を読み込む作業を通して、私自身の頭の整理も進めたいと思っています。先行研究で描かれてきた「搾取される存在としての労働者」を再構成するのではなく、また労働のみに着目するのではなく、都市に生きる外国人労働者たちを俯瞰的に捉えられるような研究に発展させて参ります。

最後になりましたが、1年6ヶ月という長期間に渡り、留学そして現地調査を行うという貴重な経験を与え、サポートして下さった松下幸之助記念財団のみなさま、選考委員の先生方に心から感謝申し上げます。現地で得たデータ・知見・先生・友人たちが、調査研究という枠を超えて、私という1人の人間を大きく成長させてくれたことは、何よりも素晴らしい経験でした。本当に有難うございました。

## フィールドでの写真

【写真1;カンボジア人労働者の住居(バンコク郊外の県にて)1つのスペースに若い夫婦と1~3人の子どもで住む。個人農家の敷地内にあるバラックで、身分証明書を持たない労働者は、敷地内から出ることなく、カンボジア語のみの世界で暮らすので、タイ語を理解する人は少ない】



【写真2;英語の授業を受けるミャンマー人労働者たち。10~20代の少年少女が主であり、任意ではあるがほとんどの生徒が学生服(白いシャツに黒又は紺のスカート/スラックス)を着用】



【写真3;NGOの職業訓練所にて料理を習う男性労働者(右)と申請者(左)。この男性は定食屋の厨房で働いているが、タイ料理や西欧料理を覚え、自分で屋台を始めたいという理由で受講している。手に持っているのはこの日作った豚丼(右)とラートナー(あんかけ米粉麺)】

